業　務　計　画　書
（平成２４年度）

Ⅰ．業務の内容

１．業務の題目

「新しい科学コミュニケーションの探索」

２．担当フェロー

佐倉　統

３．業務の目的（２年間）

ここ 10 年で科学コミュニケーション活動が活発になり、その主体や形態の多様さが増している。科学カフェなど研究者と社会の距離を近づける試みが定着し、大型研究プロジェクトにアウトリーチ活動が義務づけられるようになるなど、一定の成果はあげてきたといえる。しかしその一方で、科学技術系のコミュニケーション・イベントの参加者の多くが「科学技術に関心が高い」「文化資質が豊富」な人たちにしか届いていないという指摘や、科学技術コミュニケーション活動の目指す方向が明確でないという批判などもなされている。

これらの経緯と現状を踏まえ、当研究では科学コミュニケーション概念の整理と枠組みの再検討をおこない、科学知と社会知の接する領域における活動を、新たな科学コミュニケーションの様態として位置づけ直し、これからの科学コミュニケーションのあり方を提示することを目標とする。

この目的を実現するため、これまでの科学コミュニケーションの経緯、社会における科学技術の位置づけを再考し、「伝える」科学コミュニケーション、「つくる」科学コミュニケーションという枠組みでは取りこぼされて今までの科学コミュニケーションでは注目されてこなかった分野に焦点をあて、科学技術の興味の潜在層に向けた、より有効な科学コミュニケーションの領域と手法を探る。これらの分野が科学をどのように取り入れ、使いこなしているかを探ることで、「科学知」や「経験知」にもあてはまらない「新たな知」のありようを浮き彫りにし、それらの知見を科学コミュニケーション全体に還元することが可能となるだろう。

４．当該年度における成果の目標及び業務の方法

①科学コミュニケーションの概念整理と枠組みの展望

これからの日本社会における科学知と科学コミュニケーションのあり方を検討するため、今までの科学コミュニケーション活動の理念や概念を整理し、見取り図を作る。また、当センターのフェローに対するヒアリングやインタビューをおこない、当センターの活動の輪郭を明確にするとともに、幅広く多様な観点から科学と社会の関係を考察し、②のトピックの位置づけを検討する。具体的には、科学コミュニケーションの今後のあり方への意見、科学コミュニケーションとは何かに関する討論などを予定している。必要に応じて、外部有識者の意見をヒアリングすることもありうる。

②新しい科学コミュニケーションの具体的なトピックの探索と調査

今まで科学コミュニケーションとしては注目されていなかった、科学以外の分野と科学知とが接している領域に注目し、その実態や課題・背景などをインタビュー調査などによって明らかにする。具体例としては、料理の分野における分子ガストロノミー、服飾の分野におけるモードファッションを予定している。今年度および来年度以降、これらの調査から得た知見にもとづき、経験知と科学知の補完的な相互関係を明示化することと、その方法論を物作りや科学教育などの領域にも可能な限り一般化・普遍化することを目指す。このような経験知と科学知の相互関係を現在の社会情勢や文化状況に合わせてデザインすること、およびその方途を模索することが、新しい科学コミュニケーションの一翼を担うとの理論枠組み構築を試みる。

Ⅱ．業務の実施体制

業　　務　　項　　目	担　当　者	備　考
①科学コミュニケーションの概念整理と枠組みの展望	佐倉統 アシスタント：内田麻理香、磯部太一、大津奈津子、吉田実久	研究会を3か月に1回程度実施。メンバーは別紙。
②新しい科学コミュニケーションのトピックの探索と調査	佐倉統 アシスタント：内田麻理香、水島希、加瀬郁子、郷田千晶	